

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：54301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520225

研究課題名(和文)「和久里融通大念佛狂言」の基礎的研究 無言仮面劇の国際比較を軸として

研究課題名(英文) A Fundamental Study of "Wakuri Yuzudainenbutsu Kyogen" -through International Comparison of Masked Mimes-

研究代表者

村上 美登志 (MURAKAMI, MITOSHI)

舞鶴工業高等専門学校・人文科学部門・教授

研究者番号：40290762

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：壬生寺から派生した融通大念佛狂言を受け継ぎ、現在まで伝承されているのが全国に5社寺あることを突き止め、その内の3社寺は壬生寺の指導下或いは、強い影響下にあることを明らかにし、更にその中にも、小浜市の狂言は、本寺壬生寺や全国の他の社寺には伝存しない演目を有していること、その演目の構成・配置等から、本寺ではすでに失われた「融通大念佛狂言」の始原的な本質や独自性等を明らかめ、史料を駆使してその成立の古さにも言及した。

また、中国の文献調査等からは、資料を基にして和久里の演目の一つである「餓鬼角力」の地蔵や閻魔などの役割にも、新たな視点から踏み込んだ考察を加えていること等が成果として挙げられる。

研究成果の概要(英文)：In this study I have found out that "Yuzudainenbutsu Kyogen", which originated in the Mibudera Temple, has been handed down in five shrines and temples all over Japan. Among them, three shrines and temples are under the leadership or strong influence of Mibudera. Above all, Kyogen in Wakuri, Obama, has a repertoire not extant in other shrines or temples. Through analysis of its structure and arrangement, it has become clear that the repertoire in Obama has the uniqueness and original nature of "Yuzudainenbutsu Kyogen" already worn out in Mibudera, the head temple. I have also referred to the oldness of its emergence by making the most use of historical materials. Furthermore, based on a survey of documents in China, I have considered the roles of Jizo and Enma in "Gaki-zumo", one of the repertoire in Wakuri, from a new point of view.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：福井・和久里 小浜・西方寺 京都・壬生寺 佛教儀礼 佛教伝承民俗芸能 唱導 無言仮面劇 能・狂言

1. 研究開始当初の背景

「壬生狂言」に関する論考は数多いが、その成立年等を検討したものはほとんど見当たらない。

そこで、その成立が正安2年(1300)辺りであることを推定したが(拙稿「「壬生狂言」追跡 和久里融通大念佛の場合」、『軍記物語の窓』第3集、和泉書院、2007年12月)その際、「壬生狂言」の影響を受けてそれを引き継いだものや、或いは壬生寺の直接の指導下にある社寺の探索を始めたが、その中であって、福井県小浜市和久里・西方寺に伝わる「融通大念佛狂言」には、本寺・壬生寺を始め他社寺にはない特殊なものが含まれ、演目の構成等においても本寺・壬生寺にはない古態を随所に留めており、演者の動態解析等も含めてこれらの解明の必要性を強く感じたからである。

また、貴重なものでありながら、「和久里融通大念佛狂言」に関する本格的論考はこれまで皆無であるため、長年の「佛舞」に関する一連の研究で培った調査・研究方法を駆使して、その全貌を浮かび上げようと考えたのが研究当初の背景である。

さらには、若狭・越前地区の地域貢献の一環としても、こうした研究が重要なものであることは、言を俟たない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、一つに、夙に著名な「壬生狂言」に付随したものとしてではなく、本寺の壬生寺ではすでに後退している始原の佛教伝承芸能としての一側面と、その精神風土をも、地方の一寺院の伝承芸能を足掛かりにして、これを総合的に明らかにしようとするものである。

それはこれまで、「和久里融通大念佛狂言」の本格的研究が成されてこなかったからである。「融通大念佛狂言」を伝える和久里の西方寺とは、名ばかりのもので、60年ほど前の台風によって、寺院の伽藍はもとより、寺の史(資)料も含めた全てのものが流され、今は空き地が残るのみで、寺院は名前だけ残り、どこにも存在していないからである。その空き地内において、地元民が6年に一度、伝承を絶やさぬように何とか続けているというのが、実情であるからだ。

それは、歴史的背景はもちろんのこと、演者を含めた「無言仮面劇」としての側面からも、こうした「和久里融通大念佛狂言」に光を当て、その全貌を明らかにしたいと考えたからに他ならない。

3. 研究の方法

本研究は、5年間に亘って、「和久里融通大念佛狂言」に関する調査研究を行った。それは、

(1) 本寺・壬生寺からの影響と伝承時期。

(2) 本寺・壬生寺から伝承された、或いは影響を受けて成立した「融通大念佛狂言」伝承社寺の探索とその実態の調査研究。

(3) 本寺・壬生寺にはない和久里の演目に関する調査研究。

(4) 国内外における「無言仮面劇」等に関連する文献等の調査研究。

(5) 中国を中心とした「無言仮面劇」の調査研究。

等々に分けられる。(1)については、国内のあらゆる文献を探り、各寺に聞き取り調査などを行った。(2)については、判明した本寺・壬生寺以外の5社寺の狂言をデジタルカメラに取り込み、比較分析を施した。(3)については、全6社寺各自の演目を分類し、その出入りを始め、歴史的変遷等にも配慮しつつ、和久里の全9演目については、その演目内容を徹底的に分析して、本寺との相違点等を浮き彫りにした。(4)については、国内はもとより、「無言仮面劇」に関わる中国の文献を探索した。(5)については、国外における「無言仮面劇」のフィールド調査等を実施した。

以上が、具体的な研究方法である。

なお、(5)のフィールド調査については、中国奥地での民族紛争問題や政治的問題等から、その地に立ち入ることが出来なくなった箇所があるため、十分な調査を実施することが適わなかった。

これらについては、いずれ安全に立ち入ることが出来る日がくれば、機会を見て、補足調査を実施し、何らかの形で報告したいと考えている。

4. 研究成果

まず、3.「研究の方法」に記した、(1)の「本寺・壬生寺からの影響と伝承時期」については、狂言の伝承時期の検討から、従来の江戸期成立説を遡るものであることを提唱し、能・狂言の歴史的史(資)料や福井に残る地方史(資)料なども援用して、考察を加えた。

狂言の歴史は古く、貞和5・正平5年(1349)に四条河原で行われた「勸進田楽」や、寛正5年(1464)に糺河原で上演された「勸進能」には、狂言の現行演目に名を留めるものがある、その成立の下限もそこに求められるからである。

また、若狭の地は「曲舞」である「幸若舞曲」発祥の地であり、若狭地方での狂言は13世紀にはすでに上演されており、正安2年(1300)頃には成立していた「壬生狂言」が、和久里に伝播してきたのも、それを少し降る時期であろうことを推定した。

次に、(2)の「本寺・壬生寺から伝承された、或いは影響を受けて成立した「融通大念佛狂言」伝承社寺の探索とその実態の調査研究」については、本寺・壬生寺の影響を受けて成立した、或いは壬生寺の直接指導にかか

る5社寺を突き止め、その特質を分類整理した上で、和久里の「融通大念佛狂言」の内実を明らかにした。それは、「和久里融通大念佛狂言」9演目全ての内容と他の能・狂言との比較検討を行い相違点等を明確にした。

その他社寺とは、

「千本系んま堂大念佛狂言」(京都市・引接寺)

「嵯峨大念佛狂言」(京都市・清凉寺釈迦堂)

「神泉苑大念佛狂言」(京都市・神泉苑)

「大覚寺壬生狂言」(兵庫県尼崎市・大覚寺)

の社寺であり、たとえば、相違点としては、の千本系んま堂で上演される狂言の多くは、他社寺とは違って有声で行われるが、演目の内、「閻魔庁」と「芋汁」は無言で上演されている。

そして、この「閻魔庁」は、本寺・壬生寺の「賽の河原」に酷似しており、「芋汁」も壬生寺の「山端とろろ」とほとんど同じものであることなどが判明した。

「和久里融通大念佛狂言」は、6年毎の子と午の年に奉納されるが、演目内容・構成に他社寺とは大きな違いを見せる。

それは、以下の通りの構成内容である。

初日

午前 「餓鬼角力」「花盗人」「炮烙割り」

午後 「とろろ滑り」「座頭の川渡り」

「愛宕詣り」(宝塔縁起奉読)

「狐釣り」「腰祈り」「寺大黒」

中日

午前 (宝篋印塔供養)(大般若経奉読)

(宝塔縁起奉読)

午後 「とろろ滑り」「狐釣り」「腰祈り」

「炮烙割り」(宝塔縁起奉読)「寺大黒」

「餓鬼角力」「花盗人」「座頭の川渡り」

「愛宕詣り」

楽日

午前 「寺大黒」「座頭の川渡り」「愛宕詣り」

午後 「狐釣り」「花盗人」「腰祈り」

(宝塔縁起奉読)「炮烙割り」

「とろろ滑り」「餓鬼角力」

この番組内容からも初日の冒頭と楽日の最後の演目が「餓鬼角力」であるところから、「和久里融通大念佛狂言」の本質が、「施餓鬼会」を明確に意図したものであることが判明し、「宝篋印塔供養」を始め、「宝塔縁起奉読」等が3日間で5回も奉納されていることも分かる。

これは、この地方の代官であった長井雅楽介が、出家を果たし、朝阿弥(沙弥朝阿)と号して、延文3年(1358)に建立した「宝篋印塔(通称・市の塔)」の供養をも絡めているのである(「和久里融通大念佛狂言」の世界 祈りの形象」、『立命館文學』第618号、2010年10月、「和久里融通大念佛狂言」の基

礎的研究」、『国立舞鶴工業高等専門学校紀要』第46号、2011年3月、「和久里融通大念佛狂言」割記」、『いづみ通信』第40号、2014年1月)。

次に、(3)の「本寺・壬生寺にはない和久里の演目に関する調査研究」については、和久里の「狐釣り」「腰祈り」「座頭の川渡り」の3演目が、本寺・壬生寺の現行演目には見えないものであるところから、その理由を考究した。

壬生寺は、何度も焼亡しており、演目の記録としては、江戸中期頃のもが現存最古のものになる。そこには、60の演目が記されていて、「狐釣り」「座頭の川渡り」の両演目が往古には上演されていたことを確認することは出来るのだが、「腰祈り」はそこにも見えず、嵯峨釈迦堂、千本系んま堂などの演目にも見えないものである。壬生寺焼亡以前の古記録には存していたものかも知れないが、現時点では、「和久里融通大念佛狂言」独自の演目になっている。

まず、「狐釣り」は、「雑狂言」とか「集狂言」のジャンルに分類されるもので、それらの省略された形のものである。壬生寺では「釣り狐」と称したが、この演目が江戸中期以降に廃曲になったのは、現行演目の「玉藻前」で獵師と獵師の伯父に化けた古狐のやりとりなど、そのカタリのほとんどが「玉藻前」と同じものなので、重複を嫌って、壬生寺では廃曲となり、「玉藻前」の演目を持たない和久里に「狐釣り」が残ったのだと考えられる。

次に「腰祈り」は、「山伏狂言」のジャンルに入るもので、「能・狂言」の中にもこの演目はあり、よく知られているものの一つではあるが、和久里では老翁が老女に変わっていて、「能・狂言」にはない、老女の「立小便」が加えられており、壬生狂言の演目「大原女」の母親が「立小便」するものとそこは同じであるから、これも重複を嫌って壬生寺では廃曲になったのではないかと考えられる。

最後に「座頭の川渡り」は、本寺・壬生寺では、江戸中期頃に廃曲となる以前は、「盲の川渡り」として上演されていたことが分かるが、これは、「座頭狂言」のジャンルに分類されるもので、内容的には、「井碕」と「月見座頭」の酒、「鞠座頭」の3つの要素を取り入れている。この曲が消えた理由の一つに、差別に繋がること、逆説法じみて内容がよく分からなくなったからではないかなどと、これまでは考えられてきたが、「座頭狂言」では、座頭は約束事として、晴眼者にいたぶられることが多く、時代の変遷による倫理観の変化とは考えにくく、壬生寺が江戸期に未曾有の流行を見た、「夜討曾我」などの所謂『曾我物語』の「曾我物」等を積極的に演目に取り

り入れていく中で、今一つ人気のない演目が外されていったのではないかということ等を主張した(「和久里融通大念佛狂言」の世界 祈りの形象 、『立命館文學』第 618 号、2010 年 10 月)

次に、(4)の「国内外における「無言仮面劇」等に関連する文献等の調査研究」については、そのルーツとして中国からの伝来は、「佛舞」と同じように疑いのないところであるが、中国では、佛教の教義にこそ重きが置かれ、付随する芸能的なものには感心を払わない傾向が強く、まして先の文化大革命によって多くの佛教書籍が破棄されたため、関係文献調査は困難を極めたが、少しずつ成果があり、より完全を期すためにも今後も補足調査を続け、公表したいと考えている。

その他、調査の折に遇じた『太平公記』巻第 109「趙泰」の項や、『目連三世宝巻』「宣統元年春王月、蘇城・瑪瑙經房蔵板」などの記述を基にして、「和久里融通大念佛狂言」の演目の一つである「餓鬼角力」の「地蔵菩薩」と「閻魔大王」が、日本では何故、同一のものとして崇められるまでに変遷・変容したのかということに明確な道筋をつけることが出来たように思われる。

最後に、(5)の「中国を中心とした「無言仮面劇」の調査研究」であるが、これは、如上でも触れたように、中国における民族紛争問題や政治的問題等から、その地に立ち入ることが出来なくなった箇所があるため、十分に調査を実施することが適わなかったが、いずれ期を見て補足調査を行い一書に纏めたいと考えている。

また、中国の大学から執筆依頼を受け、同大学出版社より発刊予定の比較文化・文学を研究する学術研究誌に、「和久里融通大念佛狂言」関係の中国語論文 2 本を平成 21 年暮れに入稿したが、他の論文が思うように集まらなかったとのことで発刊が遅れ、手間取っている内に、中国国内での出版が困難になるほどの急激なインフレや、尖閣諸島での漁船衝突事件等々が次々に起こり、さらには日本の尖閣諸島国有化に対する中国の国内問題などによって、ついに昨年になって、こうした日本の文化・文学に関する学術誌の発刊が見送られてしまった。

これに関しては機会を捉えて、論文の掲載発刊を働きかけてみるつもりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

村上 美登志「和久里融通大念佛狂言」の世界 祈りの形象 、『立命館文學』第 618 号、12 頁～22 頁、2010 年、査読

有。

村上 美登志「和久里融通大念佛狂言」の基礎的研究 、『国立舞鶴工業高等専門学校紀要』第 46 号、123 頁～124 頁、2011 年、査読無。

村上 美登志「和久里融通大念佛狂言」攷 「餓鬼角力」の地蔵菩薩と閻魔大王 、『論究日本文學』第 99 号、15 頁～24 頁、2013 年、査読有。

村上 美登志「和久里融通大念佛狂言」割記 、『いずみ通信』第 40 号、1 頁～2 頁、2014 年、査読無。

〔学会発表〕(計 3 件)

村上 美登志「和久里融通大念佛狂言」について 、『中世軍記物語研究会』2009 年 9 月 27 日、大阪中央公会堂。

村上 美登志「和久里融通大念佛狂言」の世界 、『日本文学学会』2010 年 9 月 26 日、立命館大学。

村上 美登志「壬生狂言」追跡 和久里融通大念佛狂言の世界 、『若狭の散歩道』編集委員会主催招待講演、2012 年 3 月 18 日、小浜市井上耕養庵。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 美登志 (MURAKAMI, MITOSHI)
舞鶴工業高等専門学校・人文科学部門・教授

研究者番号：40290762